「真理は自由を得させる（1）」

ヨハネによる福音書 3 章 22～30 節

私たちはここまで、「ヨハネによる福音書」を御一緒に、順を追って丁寧に読み進めてきました。前回予定の 6 月は事情によりお休みを頂きましたが、今月は再び本文を先に進め、3 章 22～30 節がその箇所となりました。

今回の登場人物は、バプテスマのヨハネ。またまた、かのヨハネの登場です。1 章の 6 節以降、5 回目の登場になります。バプテスマのヨハネについてはすでに何回か触れましたので、改めて詳しく述べる必要はないかと思います。旧約時代最後の預言者とも、旧約と新約を繋(つな)ぐ橋渡しの預言者とも言われ、救い主キリストを指し示した人物とも言われています。なかでも、イエス・キリスト御自身がバプテスマのヨハネを称し、「**およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない**」（ルカ 7：28）とまで言われているのは特筆すべきことと言えるでしょう。主イエス御自身が「**バプテスマのヨハネ以上の人物はこれまでに出ていない**」とまで言われるのですから。いったい、何をもってそう言われるのか。バプテスマのヨハネのどこを指して、そう言われるのか。その核心はすでに触れたとおりで、「**神を第一とし、第一のものを第一とすること。心を尽くしてそうすること**」、そのような姿勢がそれだったように思われます。5 回目の登場となる今月は、これを前提としたうえで、いま一つ別の視点から、ヨハネの偉大さの内容を掘り下げてみられればと思います。

それは、「真理の追求」とでも呼ぶべき、その真摯(しんし)な姿勢です。「中身の追求」「内実の追求」「本質の追求」とも言えるでしょうか。バプテスマのヨハネのこの姿勢を何より如実に物語るのは ヨハネが 公(おおやけ) に活動を開始した折の第一声であり、そしてまた、ヨハネが例外なくすべての者にバプテスマを施したという その事実です。マタイによる福音書の 3 章は記しています。「**そのころ、洗礼者(バプテスマの)ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣(の)べ伝(つた)え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。・・・そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で 彼から洗礼(バプテスマ)を受けた**」（マタイ 3：1～6）。ヨハネが第一義に人々に求めたのは 神殿に行って献(ささ)げものをすることではなく、「悔い改める」ことでした。外側の事柄を云々(うんぬん)することでなく、まずもって 内側の思いを整えることでした。しかも、それを例外なくすべての人に求めた。それはいったい、何を意味していたのでしょうか。それはすなわち、ほかならぬユダヤ人たちにもそれを求めた、ということです。これは 考えてみれば、大変なことで、もっと言うなら「とんでもないこと」だったように思われます。なぜなら、ユダヤ人は神に選ばれた民であり、（男）性器に傷を付ける「割礼(かつれい)」という儀式を受けて

すでに聖(きよ)く（聖別）されている。だから、ユダヤ教に改宗した異邦人（他国人）ならまだしも、ユダヤ人は罪の清めのバプテスマなど受ける必要はない、とされていたからです。ですが、バプテスマのヨハネはそんなユダヤ人にも悔い改めのバプテスマを迫った。例外なくすべての人に、それを求めたのでした。バプテスマのヨハネは、外側のあれこれにではない、内なる内実に真理が根付くことを求め、内なる事柄に本質が息づくことを求めたのだろうと思います。問題は事の「中身」であって、「内実」である。外側の装いではない。それが、ヨハネが人々の前に突き出したことではなかったか。そう思わされています。

このバプテスマのヨハネが現代の私たちのもとに甦(よみがえ)ったとしたら、ヨハネは私たちに いったい何を語り、何を求めるだろうか。「聖書を読む」ということは、常に繰り返し、そのように想いをめぐらし、そのように自問して、そして そのように問い合うことだと思われます。そして そのとき、バプテスマのヨハネはきっと、次のように言葉を投げかけてくるように思うのです。「誰もが皆、例外なく悔い改め、新たにされ続けるように。外側のあれこれで固まって出来上がってしまったら、信仰は中身や内実が薄れ、生気ある息づかいが失われていく。それは、バプテスマを済ませたクリスチャンとて 無関係なことではない」。もうバプテスマ（という式）が済んでるので とか、教会学校の教師や教会の執事を何年も務めてきたし とか、はたまた信仰歴・教会暦・牧会歴〜年のベテランだから とか、事の核心はそういったことではない。そうではなくて、そうしたあれこれへと私たちを押し出して向かわせる、その根っこの真理なのだ。その真理と向き合う、その姿勢なのだ。バプテスマのヨハネはきっと、そんなふうに言うのではないでしょうか。ヨハネにとっては まずもって中身が大事なのであって、内実や本質こそが事柄の中心にあったからです。

そして、あと一つ。こうした真摯(しんし)な在り方から生まれる、「変えられる」という出来事です。より丁寧に言うなら、このようにして真理と真摯に向き合い、これを内実として誠実に受け止めるとき、私たちの内にどのようなことが引き起こされるのか、ということです。

今月の箇所は、イエス・キリストが弟子たちとユダヤ地方に行かれ、そこでバプテスマを授けておられた（22)、という記述から始まります。福音書の著者は「洗礼(バプテスマ)を授けていたのは、〔実際には〕イエス御自身ではなく、弟子たち」だった（4：2）と、続く 4 章で但し書きをしていますが、主イエスのグループもまた、バプテスマを行なっていたことが分かります。これに対し、バプテスマのヨハネは「サリムの近くのアイノンで洗礼(バプテスマ)を授けていた」(23）と、今回の箇所に記されています。サリム（＜アラム語）は「平和のうちに」との意味の、また アイノン（＜アラム語）は「泉の場所」との意の地名で、ヨルダン川の北の方に位置しています。地名の意味からして、一帯は水が多く湧(わ)き出(い)で、緑が豊かで暮らしやすいところだったのでしょう。一方、主イエスのグループがいたユダヤ地方は、具体的にはどこを指しているのか、よく分かりません。しかし、いずれにせよ、双方がさほど離れていない場所で 共にバプテスマを施していたと考えられます。

事が起きたのは、そのときでした。バプテスマの「ヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こ」(25) ります。「清めのバプテスマ」をめぐっては 当時、人々の関心が高く、少なからず論争がなされていました。このとき、具体的に何が問題となったのか、それは定かではありません。ヨハネの弟子たちと言い争ったユダヤ人は、「ヨハネのバプテスマとイエスのバプテスマと どっちが正当で、どっちが正しいのか」と尋ねたのかもしれません。真相は定かではないものの、ただ確かなことは、人間的な言い方をすれば、イエス・キリストがそれなりに成功を収めていた、ということです。人々は今や、バプテスマのヨハネのもとから主イエスのもとへと、その目を移しつつありました。そんななか、ヨハネの弟子たちは心穏やかでなかったでしょう。「新参のイエスなぞに出し抜かれて、自分たちの先生が無視されつつある」。彼らの内にそんな妬む心が頭をもたげても不思議はありません。弟子たちは言っています。26 節、「ラビ〔すなわち 先生〕、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています」。考えてみれば、身内の者にこう言われて、普通、どんな気持ちがするでしょうか。そして、私たちだったら いったい、どうするでしょうか。同情の言葉を心悪く思わず、身内の後押しをいいことに、自分もまた被害者意識をつのらせて、「不当な扱いだ」と腹を立てはしないか。浅薄な同情は、心の貧しい者にとっては 時として、害をもたらすものともなりかねません。「人より上になりたい」「他の人を出し抜きたい」という思いが私たち・人間からはなかなか抜け切れないからです。

ちなみに、発展途上の新興国の話として、こんな笑い話が伝えられています。

先進国に追いつこうと、国策として 国営のテレビ網が敷かれました。ただし、チャンネルは一つだけ。政府が用意した番組や情報を一方的に流すだけです。当然ながら、国民の間に不満が積もります。そこで、政府は急遽、もう一チャンネル、チャンネルを増設。お楽しみ番組を放映し始めました。ところが、そんなある日のこと、「大統領の特別メッセージを流すので、国民は皆、第１チャンネルを見るように」と命じられます。人々はチャンネルを「1」に合わせて、テレビを見ました。しかし、延々と続くメッセージに疲れ切り、辛抱できなくなる人たちが出始めます。彼らはついに、チャンネルを「2」に切り替えました。すると そのとき、彼らがそこで目にしたのはいったい、何だったか。銃を構えて、「第１チャンネルに戻せ」と命じる兵士の姿でした。

話自体は作り話かもしれません。けれども、私たち・人間の隠しがたい性分を暗示して、そこには鋭く深いものがあると思われないでしょうか。大統領であれ庶民であれ、人の心の奥底には「他よりも上に立ちたい。そして、周囲の注目を得たい」といった、時に「顕示欲」や「求心力」とも呼ばれる そんな思いが拭いがたく潜んでいて、それらの実現・維持のためにあの手この手を弄することが少なくないからです。

ですが、バプテスマのヨハネは違っていました。弟子たちの同情の言葉に、ヨハネは答えて言いま

す。30 節、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」。そこに見るのは、自分の務めをそのままに喜び、その務めに満足する低く遜(へりくだ)った姿です。ヨハネの言葉には、裏が感じられません。よくある、謙虚さを装った言葉だけの謙遜は感じられません。私たちを縛って身動きできないようにし、本来のいのちを細くみすぼらしいものにしている 世の様々なこだわり。私はこのヨハネの内に、そこから解き放たれた者の姿を見る思いがしています。競争意識から解放され、プライドから・思わくから・しがらみから解き放たれ、貧しい自意識や思い煩いから解放された人間の有(あ)り様(よう)です。それはとりもなおさず、内なる中身の根っこが自由にされた人の姿なのではないか。そのようにして本当の自由を味わった人間の姿なのではないか。そう思われてなりません。

だとしたら、いったい 何がヨハネをそのようにしたのか。それこそ、私たちの何より知りたいところではないでしょうか。この私はこう思わされています。「真理」がヨハネを自由にした、と。

東京の永田町に、国立国会図書館という図書館があります。道路を隔てて 国会議事堂の隣りにある、日本で一番大きな図書館です。その本館に入ると（新館もあるので要注意)、ホール正面に受付けカウンターが広がっています。そして、そのカウンターの上方全面に梁(はり)のようにしてコンクリートの打ちっ放しが長く大きく迫(せ)り出(だ)しているのですが、そこにどんな言葉が記されていると思われるでしょうか。なんと、「真理がわれらを自由にする」と、そう刻まれているのです。これは直接には「国立国会図書館法」の前文から取られたものですが、そもそもの出典は、容易に推察されるとおり、聖書の言葉にあります。ヨハネによる福音書の 8 章 32 節です。ヨハネ 8：32 は厳密には 新共同訳にあるとおり「真理はあなたたちを自由にする（であろう)」となりますが、法案の起草に参画した羽仁五郎(はにごろう)参議院図書館運営委員長がドイツ留学中に見た大学の銘文を基に創案したものと言われています。いずれにせよ、国立国会図書館の本館ホール正面に そのようにして、ギリシア語と日本語で聖書からの引用が記されている。“Ｈ(へー) ＡΛＨΘＥＩＡ(あれーせイア) ＥΛＥΥΘＥＰΩΣＥＩ(えれうせローセイ) ΥＭＡΣ(ヒューマース)” 「真理がわれらを自由にする」と。もちろん、公立の図書館ですから、信仰的な意味においてではなく、思想的・哲学的な意味合いで用いられているのは言うまでもありません。しかし、「真理は自由を得させる」（口語訳）とは、まさに「真理」ではないでしょうか。ただし、聖書の語る真理とは、自分で内につくり上げた思想的・哲学的なそれではありません。そうではなく、聖書の言う真理とは イエス・キリストというお方、その方そのものを意味しています。ヨハネによる福音書は、主イエス御自身の言葉として、14 章 6 節でこう語ります。「わたしは道であり、真理であり、命である」。それは、私たちが自身でつくり上げる考えや思想・哲学と聖書の信仰との本質的な違いを示唆する一言(いちごん)のように思います。聖書の語る信仰とは 単に自分の頭や心で生み出したり創出したりするものではなく、何よりもまず、その人となりが丸ごとそのまま真理であられるイエス・キリストとの出会いから始まる。そこから自分を開かれ、そして主イエスを内に受け止めて、そこで共に生きていただくこと。そのようなもののように思われます。聖書の言う「真理は自由を得させる」とは そのようにして、真理であられるイエス・キリスト御自身が我が内に生きて、私たちを貧しく虚(むな)しい拘(こだわ)りから解放してくださる、ということではないでしょうか。

とはいうものの、その一方で、イエス・キリストとのこうした出会いが焦点のずれたものであったり、どこか自己本位な装いのレベルにとどまったりするとき、私たちは 2 つの落とし穴にはまりかねないようにも思われます。一つは、信仰が道徳の戒めになって、うれしいものではなく、きつく苦しいものになってしまうこと。あと一つは、信仰が出来上がってしまって、そこで自己満足の胡座をかき、そして傲慢な貧しいものになってしまうことです。

お聴きの方もおられるかと思いますが、ラジオの放送局に「FEBC」というキリスト教専門の局があります。その局の発行する機関紙に、以前、次のような手紙が寄せられていました。

長い間、お世話になりました。今日は、スタッフの皆様にお礼とお別れを申し上げるためにお手紙を差し上げました。番組を聞き、教会に足を運んで、キリスト教に入信した私です。この一年、自分なりに努力し、一生懸命、信仰を深めようとしてきました。でも、今はもう、やめることにしました。私にとって、イエス・キリストはやはり、重すぎました。負うには重すぎるお方でした。これまで、良い番組をお聞かせくださり、本当にありがとうございました。皆様、お元気で頑張ってください。

なんとも寂しく、悲しい手紙です。「負うには重すぎるお方でした」とあります。自由がなかったのでしょう。うれしい喜びがなかったのでしょう。主イエスの御言葉が「恵み」のそれではなく、倫理や道徳の努力目標としてしか受け取れなかったのだろうと思います。言うなれば、聖書が修身の教科書となり、戒めの書となっていた、ということです。「キリスト教に入信した」「努力し、一生懸命、信仰を深めようとしてきました」との言葉にも、そうした受け止め方が感じ取れます。しかし、私たちはキリスト教という「宗教」に入信するわけではありません。また、道徳の教えを身につけようと、自分のガンバリズムで必死にもがくのでもありません。私たちが信じて信頼を置くのは 単なる教えとしての宗教ではなく、イエス・キリストという具体的なお方、その方そのものに、です。そして、そのイエスというお方が今なお生ける主として、私たちに伴い立ってくださっている。赦しと力の御手をもって、この私たちと一緒に歩んでくださっている。そう信じられるところから来るうれしさと感謝の思い。そこから、浅薄なガンバリズムとは違う「信仰の向上心」とでも呼ぶべきものが生み出されてくるのではないでしょうか。それは自らの力こぶを頼みとする単なる努力信仰とも違えば、「あれダメ、これダメ」「アレしろ、コレしろ」といった強いられた禁欲主義や奉仕主義とも違います。それらは、とうてい到達しえない遥か彼方の目標をただ重荷として この私たちに負わせるだけでしかないでしょう。そこに、自由のうれしさはありません。私たちが主イエスを負うのではない。そうではなく、主イエスが私たちを負ってくださるのです。

他方、真理との出会いに自己本位な色合いが増すと、甘えに胡座をかいた自己満足が生まれ、信仰が傲慢で貧しいものとなっていくようにも思われます。言葉を換えれば、出来上がってしまった人の自己満足と傲慢とでも言えるでしょうか。偉くなってしまった人のそれら、と言ってもよいかと思います。例えば、聖書や説教はノンクリスチャンに信仰を促すものであって、すでに信仰者である自分

にはもう そんなに必死こいてどうこうするようなものでは・・・とか。そんなであれば、手慣れた信仰の言葉が口に浮かぶわりには 聖書の言葉が生き生きと深く内に響かなくなっても故なし、と言えるでしょう。何か大切なところが鈍化し、また高慢になっていく誘惑が そこには見え隠れするように感じられるのですが、どのように思われるでしょうか。私たちはここで、キリスト教史上最大の伝道者と言われる使徒パウロのあの言葉を想い起こさねばならないように思わされています。「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。・・・わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事に努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走」っているのである（フィリピ 3：12～14、口語訳)。パウロが偉大なのは、どこまでいっても出来上がってしまわなかった、どこまでいっても常に求道の人だった点にあるように思われます。

しかしながら また、真理がいかにかして内に宿り、そしてそこに息づくとき、私たちは実際 自由というものを知らされる、というのも事実ではないでしょうか。そして、そのようにして与えられる紛い物でない自由は 私たちを貧しい縛りから解放し、私たちをより高い所へと押し上げ、また引き上げてくれるにちがいありません。であれば、そこに強いられた苦痛が居座るでしょうか。そこでは、自らを縛っていたものが緩くされ、自身が前に向かって開かれていくのではないか。そのようにして、本来の自分へと自分らしく豊かに膨らまされていくように思われます。そんなうれしさが そこには伴うように思われます。

それにしても、「自由」とはそもそも、どんなものなのでしょうか。それは一見 分かっているようで、どこか捉えどころのないものでもあります。ちなみに、かの有名な画家の安野光雅さんが 冗談混じりながら、自由についてこんなことを言っていました。「文字としてはそこら中にかきちらされているが、実体としては非常に珍しいもの。強いて探せば、便所の中の時間と空間がそれに近い」。要するに、トイレの中にいるときのように、誰にも邪魔されないこと。自由とはそういうもの、ということでしょうか。たしかにそれも自由でしょうし、またたしかに、それは「実体としては非常に珍しいもの」にちがいありません。けれども、私たちがここで聴こうとしているのは、聖書はそれをどう言っているのか、どうあることが自由だと 聖書は言っているのか、ということです。私たちの知りたいのはそこなのですが、その点については、落とすことのできない書物があります。宗教改革者のルターが書いた古典的な書物、『キリスト者の自由』です。ルターはそこで、自由には 2 種類のそれがある、と述べています。すなわち、「誰からも自由な、誰にも従わなくてよい自由」と、そしてまた「誰に向かっても自由な、誰にも仕えていく自由」の二つである、と言うのです。そして、次のように語ります。

「キリスト教的な人間」とは何であるか、またキリスト者にキリストが確保してあたえたもうた自由とはどんな性質のものか、・・・これを根本的に認識できるように、私は・・・次の二命題をかかげたいと思う。

キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人(なんぴと)にも従属しない。

キリスト者はすべてのものに奉仕する僕(しもべ)であって、何人にも従属する。

キリスト・・・は・・・すべてのものを脱ぎすてて、僕の姿をとり、あらゆることを行い、且(か)つ忍び、わたしたちの最善のほかに何をも顧みられなかった。すなわち彼は自由であったにもかかわらず、われわれのために僕となりたもうたのである。

見よ、これが、心をあらゆる罪と律法と誡(いまし)めとから自由ならしめるところの、真の霊的なキリスト教的な自由であり、あたかも天が高く地を超えているように、高くあらゆる他の自由にまさっている自由なのである。神よ、われわれをしてこの自由を正しく理解し、且つ保つことをえさせて下さい。アーメン

つまり、ルターが言うには、聖書の語る自由には 基本的に２種類の自由がある、と言うのです。一つは「何人(なんぴと)にも従属しない自由」、すなわち「～からの自由」であり、あと一つは「何人にも従属する自由」、すなわち「～への自由」です。キリスト者はそのようにして、イエス・キリストによって様々な縛りや囚(とら)われ、しがらみから自由にされる。しかしまた、主イエスの下さる自由はそこにとどまらず、人を奉仕し仕える者へと変えてゆく。私たちにそのような、さらに豊かな自由を与えてくださる、と教えたのでした。

バプテスマのヨハネとその弟子たちとの違いも、そのようなものが内に宿っていたか否か、そして押し出されるべき自由へと押し出されていたかどうかという、まさにその相違から来ていたように思われます。

ヨハネの弟子たちは師のもとに来て、ヨハネが蔑(ないがし)ろにされていると不満をぶつけました。「良きものはより良きものの妨げになる」という格言があります。ヨハネに不満をぶつけた弟子たちの有(あ)り様(さま)は、まさにその好例と言えはしないでしょうか。彼らはヨハネの内に神の働きを見て、「良きもの」ヨハネに従いました。しかし、ヨハネに執着し、そこに固着するあまり、そこから離れることができなくなっていた。ヨハネ以上の主、「より良きもの」イエス・キリストに従うことができなくなっていたのでしょう。不十分な理解や自己満足はより深い真理の在(あ)り処(か)を見えなくさせ、向上心の薄れは差し出された真理を見過ごしにさせてしまう、ということでしょうか。ですから、ヨハネは弟子たちに向かって言います。28 節、「わたしは『自分はメシアではない』と言い、『自分はあの方の前に遣わされた者だ』と言ったが、そのことについては、あなたたち自身が証(あか)ししてくれる」。つまり、「あなた方は、私が言ったことを聞いている。その証人である。聞いたことに真っすぐ耳を傾ければ、私が何を言わんとしたのか、何を意味したのか、分かるはずだ」と、ヨハネはそう諭(さと)したのでした。弟子たちはいまだに妬(ねた)みの中にあり、

囚(とら)われの中にあって、より良きものに自分を開くことができずにいた。自分をより良きものへと差し出すことができないでいました。弟子たちはヨハネの言葉を耳では聞いていたものの、心で聴くことが不十分だったのではないでしょうか。

これに対し、しかし ヨハネは違っていました。ヨハネの語る「花婿(はなむこ)と介添(かいぞ)え人(にん)」の譬(たと)えは、その信仰を麗しくも生き生きと伝えています。ヨハネは言います。29 節、「**花嫁(はなよめ)を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている**」。当時、ユダヤの結婚式がどのようになされていたのか、必ずしも全国一律ということではなかったようですが、しかし 一般的に広く見られたことがありました。花婿に介添え人が付き、その介添え人が重要な役割を果たしたことです。「介添え人」とは「友人」を意味し、今日(こんにち)の「ベストマン」に当たりますが、その役割は小さくなかったと言われています。式の準備を整えることから始まり、花婿の代わりに花嫁を迎えに行く。そして、花嫁を花婿のもとに連れてきて、引き渡します。そのようにして、花婿が幸せそうに花嫁を迎えるのを、傍らで自分のことのようにうれしそうに見守ったといいます。さらに、それだけでなく、これに続いて時に見られた情景があった、と述べる人もいます。式が終わって 花嫁と花婿がふたりの部屋に向かうとき、介添え人がそこまで付き添ったというのです。さらには、その後(あと)も介添え人は外に残って、そこで部屋の番をした、という人もいます。「**花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ**」との言葉は、その光景として はたして、これらのどれに一番ピッタリきそうでしょうか。それは どうやら、第一の情景に最もしっくりいくように感じられます。すなわち、介添え人が花嫁を連れてきて 花婿に引き渡したとき、花婿はこれを幸せそうに迎える。そして、喜びの言葉を花嫁にかける。そばに立つ介添え人はそれを耳にし、自分のことのように心を躍らせる、というのではないでしょうか。が いずれにせよ、ヨハネがここで言わんとしたこと、それは「**結婚は花婿と花嫁のものである。すなわち、花婿である主イエスと花嫁であるイスラエルの人々のものである。大事なのはふたりであって、介添え人ではない。介添え人は、花嫁であるイスラエルの人々を花婿である主イエスのもとに連れてくる。ただそれだけだ。そして、自分はその介添え人であって、花婿ではないのだ**」ということなのでしょう。そして、言うのでした。「**わたしは喜びで満たされている**」。このように、ヨハネは花婿である主イエスを嫉妬しませんでした。弟子たちの同情にも乗りませんでした。それどころか、むしろ逆に、彼らからイエス・キリストの話を聞き、それを自分の喜びとして喜んだのでした。

そして、ヨハネの言葉の先に もう一つ、暗示されていることがあるのかもしれません。それを ヨハネ福音書の編著者（たち）が最終的にどれだけ意識して書をまとめたのか、それは定かではありませんが、「イエス・キリストと教会」との関係がそれで、新約聖書の著者たちが繰り返し、教会を「キリストの花嫁」と呼んでいることです。そう呼ぶことにより、彼らは何より親しい、何より近しい密な関係を表現しようとし、両者が一体であることを語ろうとしたのでした。ある聖書学者は言っています。「**結婚とは二人が一つになることで、愛において 一致へと育(はぐく)まれていくこと**

である」。その中心は、愛にあって自らを献げること、と言えるでしょう。主イエスはそのようにして、教会のためにそのいのちを献げてくださいました。であれば、教会もまた、同じ愛をもって主イエスに自身を献げてゆくのは自然なことと思われます。キリストを信じる者たちはそのような教会の形成に携わっている、と教えられます。

大きな教会が形成される〔母国の〕韓国に行き、そのような教会の中にいると、ふとこう思う。教会は牧師のために・・・あるのではないか。大きな教会が形成されると、それは牧師の名誉を高め、牧師を栄えさせるものとな・・・る。これはとんでもない錯覚であり、誘惑で・・・、われわれは、実にしばしばその誘惑に陥る。それを戒めなければならない。

在日の韓国人教会の先生の言葉で、日本人牧師との懇談の席で述べられたものです。しかし、事はそもそも、牧師だけの問題ではないように思われます。教会に関わるすべての者たちの問題ではないでしょうか。ルターと並ぶ もう一人の宗教改革者、カルヴァンは言いました。「教会を自分のものとし、キリストのものとしない者は信仰の何たるかを知らず、尊ぶべき結婚の奥義を冒す」

暗示的・示唆的ながらも、バプテスマのヨハネはこれをしなかった、ということです。ヨハネは「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(30) と、弟子たちをそう諭しています。それは、イエス・キリストに託された務めを知っており、また自分の果たすべき役割も知っていたからではないでしょうか。それらは天から与えられたもので、神がお与えになったものである、とヨハネは27 節で語ります。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない」と。私たちはそれぞれにそれぞれの「私」として神に愛され、神に生かされて用いられてゆく。人と比較するのではなく、この私への神の期待を尋ね求めることが求められているのではないか。ヨハネの言葉と有り様を知るにつけ、そのように思わされています。そして、そのように生きるとき、私たちは自分らしくあることを知らされ、自然な穏やかさのうちに豊かな自分を発見させられていくのだろうと思います。「自由」とは つまりは、そのようにして、自分らしい自然なあり方のうちに良きことに仕える者とされていくことではないでしょうか。

実際、弟子たちに対するヨハネの応答に力みや気負いは感じられません。肩を張って突っ張るヨハネは、そこに見えません。歯を食いしばる必死なヨハネも、です。あるのは、静かな強さです。私はそこに、神が下さる本来の自由というものを見る思いがします。神の真理が自由をもたらし、その自由が様々な囚われから解き放ってくれる。そして、良きことへの奉仕・献身に押し出してくれる、と そう思わされます。だからこそ また、そこには、ポーズでない自然体の謙虚さも伴うのでしょう。「あの方は、神の救い主として 世に遣わされた。自分はそれを指し示す者として、その先駆けとして 世に立たされた。だから、それにふさわしく、その務めを淡々と、が熱い思いをもって果たすだけである。それが自分の喜びであり、光栄である」。バプテス

マのヨハネは、旧約の預言から、そして束の間ながらも主イエスとの出会いからこのように示され、そうして知らされた真理に従って、そのように語り、そしてそのように生きたのだと思います。真理によって解き放たれ、真理にあって自由にされた姿がここにある、と言えはしないでしょうか。

バプテスマのヨハネは この後しばらくして、24 節に記され そこで暗示されているように、獄に入れられ、殉教の死を遂げることになります。それもまた、過酷ながらも、神の下さる自由のうちにヨハネが甘んじて受けたものと言えるでしょう。

〔祈り〕

恵みの神様、私たちは自由を得たいと願っています。少しなりとも自由にされ、気負いのない自然な思いで周囲に良き香りを放ちたいと願っています。良き事に仕えたいと願っています。

恵みの神様、あなたの下さる真理に触れさせてください。御子のいのちに触れさせ、イエス・キリスト そのお方に出会わせてください。そして、真理にある自由を味わわせてください。

恵みの神様、そのようにして 私たちを押し出し、あなたと隣り人に仕える者としてください。御心を私たちの内に養い育んでくださいますように。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン